

講演

## 【高山右近が城主だった頃の高槻】

今年(2010年)のNHKテレビ、日曜日夜8時から的大河ドラマは「龍馬伝」でなかなかの高視聴率、多くの方々がご覧になっているようですが、今から8年前、2002年の大河ドラマは「利家とまつ」で、これも高視聴率で、多くの方々がご覧になったようです。私も毎週、楽しみに見ておりました。

前田利家の役は、唐沢寿明さん。まつは、松嶋菜々子さん。「私におまかせくださいませ。」というのが名セリフでした。織田信長の役は、反町隆史さん。豊臣秀吉の役は、香川照之さんなどでしたが、その21回めに、「高山右近」と「高槻市」が登場してきました。

高槻現代劇場のすぐ近くにある城跡公園や、教会堂跡の碑、それに「高山右近」の像などが、りっぱにうつってありました。NHKの方が、わざわざ、うつしに来られていたようです。

さて、それでは今から、皆さんを、400年前の日本、430年前の高槻にご案内することにいたしましょう。

皆さんの想像力を働かせてくださって、目の前に大スクリーンをセットして、430年前の高槻、高槻現代劇場辺りの高槻の様子をうつし出してみてください。

430年前のあの辺りは、どのような姿だったのでしょうか？

この時期、領内には、20以上の教会がありました。その中心は、高槻城の中にあつた教会です。教会堂は、現在の野見神社がある辺りにありました。

阪急電車の「高槻市」駅の方角から、高槻城内に近づいていってみましょう。

国道171号線の交差点をすぎて、50mほど行った所に、又、交差点があります。そこから、いよいよりっぱなお堀になります。幅は24m、小学校にある25mのプールを思いおこしてくださるといいですね。幅24m、深さ4mのりっぱな堀です。

高槻城内に入るには、三つの「大手門」がありました。東大手門、南大手門、そしてここは「北大手門」です。「北大手門」で、門番の侍たちの取り調べを受け、許可されて、初めて城内に入っていくことになります。

北大手門を通り、前の方を見ますと、少しはなれて、木造の、りっぱな教会堂が見えてきましたよ。

だんだん近づいていってみましょう。

「文化ホール」の辺りまで、やって来ました。

この辺りには、「司祭館」といって、宣教師の人たちのための建て物がありました。日本の、どのような重要人物がやってきても、恥ずかしくないように建てられている、泊まることのできる施設です。

建て物の前には、りっぱな庭があつて、背の低い木や、いろんな種類の花が植えられています。遠い所から取りよせた、りっぱな庭の石の間には、バラの花が植えられていましたよ。

司祭館の前を通過して、教会堂のそばまでやって来ました。

教会堂の周りも、大きな庭園になっています。まわりには、棕(むく)の木などの背の高い、美しい木が植えられています。

道のつきあたりには、三つの階段があって、その一番上の部分に、大きな木の十字架が建てられています。十字架のある辺りにも、囲むようにして、いろんな種類の花が植えられています。

十字架の所をぐるっと回った右手の方には、池があって、遠くの方から管を使って、水を引いてきて、その水が池に落ちるようになっています。池には、魚たちが、ゆったりと泳いでいます。

教会堂や司祭館、庭園、十字架の辺りは、三人のお年寄りのキリシタンの男の人が、仕事として、毎日、整理・整頓・掃除をしていますので、どこも、ごみ一つなく、美しく保たれています。

会堂の中に入ってみましょう。

この会堂は、高山右近が高槻城主になった、あくる年の、1574年・天正2年に、新築されました。

その当時、木材は貴重です。ほかの建物で使われていた木材を、もう一度、別の所で使う、reuse(リユーズ)する・再利用することが普通だったのですが、この教会堂を建てるにあたっては、木材や、くぎの古い物、あるいは、ほかで使った物は、一本も使われてはおりません。

それは、「主なる神・デウスをあがめ、尊ぶためには、心を新たにするだけではなくて、神さまのために使用する材料は、みんな新しくしなければならない。そういう思いがあったからです。使い古したもの、余ったものや、いらなくなった物を、主なる神さまにささげる、という考えではなかったのです。

朝早く、カラン、カラン、カラン …… 鐘が鳴り渡ります。

その鐘の音を合図にして、キリシタン達が次々と、教会堂に集まってきます。

雨の日も、風の日も、寒く、雪が降っている日でも、まっさきに、一番に教会堂にやってくるのは、だれだったでしょうか？ それは、高槻城主・高山右近ジュストと、右近のお父さんの、高山飛騨守ダリオの親子だったのです。

彼らが床の上にひざまずいて、声高らかに、「主の祈り・パアテルノステル」を祈っている声が聞こえてきます。その当時の言葉のまま、祈ってみることにしましょう。

天にまします われらが 御(おん)おや。  
御名(みな)を たっとまれたまへ。  
御代(みよ) きたりたまへ。  
天において、おぼしめすまなごとく、  
地においても、あらせたまへ。  
われらが日々(にちにち)の御やしないを、  
今日(こんにち)、われらにあたえたまへ。  
われら、人にゆるし申すごとく、  
われらがとがを、ゆるしたまへ。  
われらを、てんたさん(誘惑)に、  
はなし玉ふ事なかれ。  
われらを凶悪より、のがしたまへ。 アーメン

高槻教会にいつもいる、常駐のパードレ・神父さんはいませんでした。

パードレがまわってこられて、高槻におられる時には、聖書からの話を、メッセージとして、とりついでくださいました。

パードレがいない時には、父のダリオか右近などの、おもだったキリシタン達が、話をしたり、或いは、「ど

ちりなきりしたん」や「こんてむつすむん地」(「キリストに倣いて」)などの霊的な書物の朗読をしたりしました。

パードレが高槻に滞在している時には、教会において、伝道集会も持たれました。

城内の人々に案内が出され、キリシタンとなった武士や兵卒の中で、妻や子ども達でまだキリシタンでない者は、会堂に来て説教を聞くように、との案内がなされました。

ただし、信仰の強制はされませんでした。話を聞いて了解した後、キリシタンになるのも、又、ならないのも自由。話される教えが、意にそわない時は、そのことによって、何ら迷惑や妨害を受けることはない、そのように伝えて、定刻になりましたら、鐘が鳴らされ、集会が始められました。

200人余りが集まりました。メッセージは、日本の仏教諸宗派の問題点を、すじ道をたて、証明してみせる内容のものでした。最後の招きの時には、説教を聞いた男女一人残らず、キリシタンとなる決心をいたしました。

高槻教会が新築されましたのは、高山右近が高槻城主になった年の翌年の、1574年・天正2年でしたが、3年後の1577年・天正5年には、1年間に、約4千名の人が洗礼を受けました。

2年後の、天正7年には、高槻領内のキリシタンの数は、2倍の8千人になりました。

その翌年の、天正8年には、6千人増えて、1万4千人になりました。

その翌年の天正9年には、領民の人口2万5千人のうち、1万8千人、72%がキリシタンであった、と宣教師たちが、報告書に書いています。

パードレ(神父のことですが)、パードレが高槻にやってこられている時には、その機会に、バプテスマ・洗礼式がもたれ、一回に500人、あるいは、1500人という風に、多くの人たちが洗礼を受けていきました。

このようにして、毎日人々が救われ、新たに洗礼を受けていく人たちが、絶えることがありませんでした。

新約聖書の中に、「使徒行伝」(「使徒の働き」)という箇所があります。イエス・キリストが復活の後、昇天され、そのキリストに代わって聖霊なる神が与えられ、その聖霊の働きで、毎日人々が救われ、洗礼を受けていき、初代の教会が出来上がっていく様子が「使徒行伝」の中に記されているのですが、まさに、この聖書のことはそのままの姿が、右近さんが高槻城主だった頃の高槻の姿であったわけです。

私たちは、このことを、「聖霊によるリバイバル」という風に言っているんですよ。

430年前の高槻の町は、聖霊なる神による、大いなるリバイバルのわざが進められていった町だったのです。

その結果が、領民の72%がキリシタンだったという数字であったわけです。

一人の貧しいキリシタンが、天に召されていきました。

当時のお葬式のやり方としては、仏教式では、死体を入れる棺(ひつぎ)は、「かんおけ」という言い方がありますが、桶の形になっていまして、そこに座っている形で入れて、そのまま、火葬にしました。

キリスト教式では、寝棺で、寝ている形で棺に入れて、そのままお墓に埋めました。

これら、お棺の世話をしたり、墓を掘ったり、死体を焼いたりすることは、「ヒジリ」と呼ばれる賤民、いやしい身分の人たちの仕事だとされていました。

一人の貧しいキリシタンが亡くなり、天に召された時、城主である高山右近自らが、お葬式の葬儀委員長

の役をつとめました。お城の武士や町の人たちも参列し、手に手に提灯(ちょうちん)を持って、教会のとなりにある「キリシタン墓地」に集まってきました。

1998年、今から12年前になりますが、1998年の6月に、日本で一番古い「キリシタン墓地」が発見されました。

教会は野見神社のところ。キリシタン墓地は、そのすぐ前にある、高槻商工会議所のある辺り一帯でした。

教会で、お葬式・召天式が行われた後、棺が墓地まで運び出されます。先頭に十字架、次に白い旗が続き、その後ろに進んでくる棺を見ますと、棺は、なんと、城主である高山右近と、お父さんの飛騨守の肩の上にかつがれているではありませんか！ その後ろに、たくさんのキリシタン達が続いています。

お殿さま自身が、貧しい一人の人のために、このようなことをしたことに對して、その場にいた人も、そのことを聞いた人も、すべての人たちが感動しました。

武士たちは提灯を手放して、争って、くわを手にとり、墓穴(はかあな)を掘り始めました。女の人たちも、手に手に、いっぱい土を持って、埋葬に加わりました。

このようにして、高槻では、領民のお葬式に、武士たちが手助けすることが、習慣になっていきました。とは言っても、右近さんが高槻城主だった12年間だけのことだったとは思いますが……。

1581年・天正9年、この年の「復活祭・パスコア」は、3月26日の日曜日です。

今年の復活祭は、特別に、はるばるローマからやってきた、巡察師のヴァリニャーノという人や、フロイス神父たちを迎えて、いっしょに祝うことになっています。

巡察師ヴァリニャーノの一行は、5日前の3月21日火曜日、淀川の向こう側、河内(かわち)の国の、岡山という所を出発して、高槻に向かいました。そして、枚方(ひらかた)の渡し場から、数隻の船がこぎ出され、淀川を渡っていきました。

高槻の船着場で出迎えたのは、城主・高山右近、弟の太郎右衛門、右近の長男のジョアン十次郎、準備のために早く高槻に来ていたセスペデス神父とペレイラ修士たちでした。

一行は、たくさんの、馬に乗った武士達に守られるようにして進んでいきました。船着場から高槻城までの道には、付近のキリシタン達や、様子を見ようと集まってきたたくさんの人達が、道の両側に立って見ておりました。

すでに「受難週」(「聖週間」)に入っていましたが、教会に着くと、持ってきていた飾りの品で、教会堂をりっぱに飾りつけました。

23日の木曜日には、聖餐式が行われ、25日の土曜日には、「パイプオルガン」が、おごそかに鳴り響く中で、礼拝がささげられていきました。集まっていた人たちは、みんな、初めて聞くパイプオルガンの音色(ねいろ)に非常に驚き、満足を覚えました。

この「パイプオルガン」は、高槻の教会に常設されていたものではなくて、移動・組み立て式のパイプオルガンでしたので、高槻の町の人たちにとっては、初めて聞くパイプオルガンの音色だったわけです。

そして、3月26日、日曜日。いよいよ「復活祭」です。

復活祭・パスコアの当日は、夜が明ける2時間前から始まります。主イエス・キリストのよみがえり・復活を

お祝いして、厳粛で、整然とした行進・パレードが行われました。

この行進には、武士たち、キリシタン達はもち論のこと、たくさんの町の人たちも加わって、キリシタンだけでも、1万5千人。全体では2万人をこえる数になりました。

キリシタンの武士達が、いろんな種類の、きれいな色で描かれた絹の旗を高くかかげているのが、風にハタハタと、ひるがえっています。

キリシタンの人たちはみんな、手に手に、提灯を高くかかげています。船の形をしたもの、お城の形をしたもの、それぞれ違った形のものがほとんどで、数えきれないほどの提灯が、途中、とぎれることなく続いていきます。

行列が、とつても、はなやかに見えます。

まだ夜明け前の、うすくらやみの中を、たくさんの提灯の灯にてらされて、光の列がつづいていく様子を、皆さんの目の前にセットされた大スクリーンにはっきりと映し出してみてくださいね。

復活祭のパレードの2万人の行列が、光の道となって、延々と、続いていきます。

安土城の近くにある「安土セミナリオ」という神学校で勉強している少年たち、25人が、白の制服を着て、手には、聖書の物語をかいた画を掲げています。

巡察師のヴァリニャーノ神父も、木の十字架をいれた入れ物を手に持って、いっしょに行進していますが、感激の涙を押さえることができないようです。まるで、「イタリアのローマに居るように」感じたそうです。

フロイス神父も、「これは、日本で今まで見たことのない、すばらしい祭典ですね。」と言いながら、感動しているのがわかります。

道にそって、行進をながめている、たくさんの町の人たちも、「キリシタンのお祝いって、なかなか、いいですねえ。」などと語り合っています。

今、お話していることはすべて、私が勝手に想像して、作って言っているのではなくて、400年前に書かれた宣教師の人達の報告書に記録されていることをもとにして、お話しているのです。

行進は、高槻城下をひとめぐりして、教会前にある大十字架をめざして、延々と、続いていきました。

高山右近は、この日、遠くは岐阜県や愛知県・美濃の国や尾張の国など、ほかの地域から集まってきた人たちや、神父さんや、修道士の人たちのために、りっぱな、お祝いの食事会を開きました。

高槻城主・高山右近にとつても、この日の「復活祭」は、最大の喜びであり、最高の一日でした。

1581年・天正9年、本能寺の変が起こる前の年の、1581年3月26日、日曜日。「復活祭・パスコア」の一日は、このようにして感謝の内に、暮れていったのでした。

高槻城主・高山右近と、その妻ジュスタさんは、どのような感謝の祈りを主なる神・デウスにささげて、一日を終わっていったのでしょうか。

以上、この当時は「戦国時代」だったということを、忘れないでください。

戦争にあけくれしているまただ中での、高山右近が城主だった頃の、高槻の姿なのです。

戦争と平和。主イエス・キリストにある平和の姿。

それは、キリシタンであろうと、なかろうと、高槻の領民にとつては、実に、言葉で言い表すことのできないほどの、幸いなひとときであったにちがひありません。

430年前、高山右近が城主だった頃の高槻は、このような様子だったのです。

右近が高槻城主であった12年間の間にも、大きな出来事は、次々と起こっています。

京都・姥柳町の南蛮寺の建設、摂津の国主・荒木村重の織田信長に対する謀叛、安土城築城、安土セミナリオの建設、本能寺の変、山崎の合戦、高槻セミナリオの開校、賤ヶ岳の戦い、大坂城や大坂南蛮寺の建設……等々々。

そして、1585年・天正13年、高山右近は、惜しみ・惜しまれながら、12年間いた高槻4万石の地を離れ、播磨の国・明石6万石に配置がえがあり、明石・船上城(ふなげじょう)に移っていきました。

ひとつ、つけ加えておきたいと思いますのは、「城主と領民の関係」ということについてです。

城主が、領民に対して、強力に支配して、生かさぬよう、殺さぬよう、最大限にしぼりとる、はむかう者は、容赦なく殺してしまう といったことは、封建体制が確立されていく、徳川時代の、幕藩体制・幕府と藩の体制の中でのことです。

右近さんが高槻城主だった頃の姿ではありません。城主と藩主。高槻城主と、高槻藩主は、決定的に違います。

高山右近は、高槻を中心とした領地をゆるさされていて、信長や秀吉に従っていた高槻城主でした。

一方、江戸時代の譜代大名・永井氏は、徳川幕府の幕藩体制にキッチリはめこまれ、その中で動いていた高槻藩主です。そして、高槻城主であったわけです。

同じ高槻城主であっても、高山右近と永井氏では、その姿勢が根本から違うのです。

高槻城主・高山右近さんの場合を考えてみましょう。

与えられた領地は、四万石という風に、石高(こくだか)で言われますように、生活の基盤を支えてくれているのは領民達です。そして、そのほとんどは農民達です。

戦国時代、外部からの外敵たちは、容易に・簡単に、田畑を荒らしたり、焼き打ちにしたり、せっかく出来た収穫物を奪っていってしまうことをします。

あの、黒澤明監督の名作「七人の侍」の映画の場面を思い起こしてくださると、よく理解していただけるのではないのでしょうか。

そうした、外敵からの盗賊行為・犯罪行為をゆるさず、外敵から領地・領民を守るということは、右近さん達、戦国時代の城主たちの仕事であり、姿であったわけです。

侵入をゆるし、奪われていってしまうようでは、領民の生活だけではなくて、城主自らの生活基盤・土台がくずされていってしまうことになるわけですから。

ですから、城主である右近さんは、領地・領民を守り、領民は右近さんに仕えていったというわけです。

ここで、「城主と領民との関係」が問われることになるわけです。極悪・非道な城主もいたはずですし、いろんな城主が、それぞれ、いろいろな形で領民に接していたわけです。

でも、右近さんの領民たちに対する接し方は、他の戦国城主たち・戦国大名達とは、まったく違っていたのです。

高山右近は、忠実なキリシタンでした。

雨の日も、風の日も、寒く雪が降っている日でも、一番に教会堂にやってきて、祈っていたことは、先にお話しました。その時、紹介しました「主の祈り・ペアテルノステル」の他にも、祈り・当時のことばでいえばオラショとして祈っていたものがあります。

たとえば「十戒」です。映画にもなって有名な「十戒」ですが、「D(デウス)の御おきての十のまんだめんとす」といっていました。「十の まんだめんとす」というのが「十戒」という言葉にあたります。

第一、第二、第三は、デウス(主なる神)に関するのですが、  
第四の戒めは、ぶもに孝行すべし。“ぶも”というのは、“ふぼ・父母”のことです。  
父母に孝行すべし。父母を大事にすべし。

第五 人を殺すべからず。

第六 邪淫を犯すべからず。好色なこと、あるいは不倫、姦淫をしてはいけない。

第七 偷盗(ちゅうとう)すべからず。盗んではいけない。

第八 人にざん言をかくべからず。ウソをついたり、人をおとしめるようなことを、言ったりしてはならない。

第九 他の妻を恋いすべからず。

第十 他もつを、みだりにのぞむべからず。他人の妻や、他人の物をほしがってはならない。

これが「十戒・十のまんだめんとす」なのですが、ほかにも、イエス・キリストが、このようにして互いに愛し合いなさい、と言って示されたことを「慈悲の所作・ミゼリコルジアの行ない」として、祈り・オラショとして祈り、唱和しておりました。

人に対して、慈悲の心をもってなすべき行ないは、14あります。そのいくつかを紹介してみますと、

一(ひとつ)には、飢えたる者に食を与える事。食べる物がない人たちに、食べ物を与える事。

二(ふたつ)には、かつしたる人に、飲み物を与える事。のどが渴いている人に、飲み物を与える事。

三(みっつ)には、はだをかくしかぬる者に、衣類を与える事。着る物がなくてこまっている人に、衣類を与える事。

四(よっつ)には、病人と牢者(牢にとらわれている人)をいたわり見舞う事。 ……………

という風に続いていきまして、

七(ななつ)には、人の死がいを納むる事。これなり。

とあります。高槻城主である高山右近が、貧しい人の棺をかついだというのも、実は、この「慈悲の所作・ミゼリコルジアの行ない」の、具体的な実践を、右近さんは忠実になしたということだったのです。

以上、すべてを語ったわけではありませんが、このような信条・信仰が、高山右近には、その根底に、しっかりと、あったのです。そして、そのことを、高槻の町で実践していったのです。キリストの愛によって、町づくりを進めていったのです。

そういう城主・高山右近やキリシタン達の姿を目(ま)の当たりにして、もし皆さんが、430年前の高槻の領民だったとしたら、どうなさいますか。

別に、信仰を強制されるということではなくても、新たに伝えられている、このような愛の宗教・キリスト教に、自分から関心をもち、そして、キリシタンになっていくとしても、不思議なことではないのではないでしょう

か。そして、そのようなことの結果が、領民の72%がキリシタンだったという、とてつもない数字になっていたのです。

でも、時代が進み、封建制度がどんどん強化されていくにつれて、このような、キリシタンの信仰、天地の造り主であられる全能の神・デウスを第一に愛し、すべての人が、神の前には、身分の差などはなく、同じように神にとって、愛されている宝のような民であるなどということは、封建制度・幕藩体制を推し進めていこうとしている者にとっては、それらを根底からつぶしていってしまう、とんでもない危険なしろ物です。

ですから、秀吉も、家康も、江戸時代を通じて、権力を握っている者たちは、徹底的に、キリスト教を、そして、キリシタンを弾圧していくことになるのです。

先ごろ(2008.11.24)、長崎で「列福式」がもたれました。この時、“福者”として列福された188名の殉教者達は、このような過酷なキリシタン弾圧によって殉教していかれた何万という方々の、そのごくごく一部の方々だったということになるのです。

そして、私たちは、まちがいなく、弾圧されていったキリシタン達の子孫ではなくて、弾圧していった側の子孫なのだと思います。

今回は、ここまでにさせていただきたいと思います。

以上。最後まで、熱心にお聞き(お読み)くださって、ありがとうございます。